

## 受託研究 三宅村郷土資料公開・保存事業

期間：2020年10月14日～2021年3月19日

〔所員〕角南聡一郎 安室 知

〔客員研究員〕田上 繁

### 三宅村郷土資料の公開と保存事業の経過

越智 信也

2015年度より田上繁所長（当時）のゼミ調査としてはじまった三宅村郷土資料の公開と保存の作業は、2016年度より受託研究として位置づけられ、2020年度で5年目を迎えた。2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響は研究所のさまざまな事業にも及び、授業がオンラインに切り替えられ、学外の出張も制限される中で、毎年行われていた三宅島への教職員と大学院生（歴史民俗資料学研究科）による調査出張もままならない状況が続き、最終的には調査を行うことができなかった。

一方、2017年以来継続的に刊行してきた『三宅島のオーラルヒストリー』シリーズの続巻の作成は予定通り進めるために、2020年10月に「三宅村郷土資料公開・保存事業」の契約が取り交わされた。

『三宅島のオーラルヒストリー』シリーズは、三宅島の生業に携わる方々の生の声を記録し、後



写真1 聞き書き調査の様子（2015年）



写真2 資料写真撮影の様子（2015年）

世に残すための取り組みとして、2015年度～2017年度まで、島内の農業、漁業、土木業、商店経営、公務員さらには古くから祭祀を司る宮司その他、さまざまな職業に携わる方々に直接お会いして、1時間～2時間程度お話を伺い、ICレコーダーに記録した音声データをテキストに起こして整理し、解説を付して冊子体としたものである。2020年度にはその4冊目が印刷刊行されて、3年間にわたる聞き書き調査の結果は概ね整理された。中でも、昭和30～40年代に最盛期を迎えたテングサ漁の様子については、直接漁に関わった方々の証言を記録することができた。三重県の鳥羽や遠く韓国からも海女として来島して、そのまま現在も住んでおられる方々からは、元々の居住地との違いや移り住むことに伴う苦労話、あるいは潜水漁の詳細を伺うことができた。また、たび重なる火山（雄山）の噴火と溶岩流による被災、全島避難（2000年9月に開始）の経験は、島の人々の生活全般に大きな影響を与えた。どんな生業に携わる方であっても、噴火という島民共通の体験に際して、悲しい別れがあったり、新たな出会いがあったり、職業を変える転機になったり等々、なすすべのない自然の驚異にさらされて、大きく生活を揺さぶられることは共通していた。

今後は、三宅島郷土資料館の資料整理をすすめつつ、三宅村教育委員会の方々との相談を軸に、資料の整理・公開・活用之道を模索していきたいと考えている。

## ■ 2020年度の活動

○『三宅島のオーラルヒストリー』4 2020年3月25日



写真3 三宅島郷土資料館の収蔵庫（2017年）



写真4 聞き書き調査の成果（三宅島のオーラルヒストリー）